

セッションⅡ：ASEAN 体験から東アジア共同体へ

1. マハティール哲学と EAEC 構想

金子 芳樹 氏

○司会（黒柳）

それでは静粛にお願いします。

前半の第一セッションに続いて、「第二セッション：ASEAN 体験から東アジア共同体へ」に入ります。第一セッションでは、ASEAN そのものがどのように協力を展開してきたかということ論じていただきましたが、第二セッションでは、「東アジア共同体」がどのようなものかという論点に軸足を移していただくこととなります。最初が獨協大学の金子先生。今回は「パワーポイント」を使用しての報告ですので、楽しみに拝聴していただきたいと思います。では、金子先生お願いいたします。

○金子

獨協大学の金子でございます。よろしく申し上げます。

私がお話しするテーマは、今、黒柳先生の方からご紹介がありましたとおり、東アジア共同体を考える際に、ASEAN の今までの体験を何か参考にできないだろうかということについてです。

特にここでは、ASEAN 体験の一つに挙げられる EAEC（日本語では「東アジア経済共同体構想」）という、かつて ASEAN の中から提唱された一種の共同体構想が、今後、東アジア共同体を考える際に何らかのヒントを提供してくれるのではないかとこの観点から検討していきたいと思います。その中で、EAEC 構想の提唱者であるマハティール氏の思想や取り組みについても検討していきます。標題に「マハティール哲学」という言葉を含めましたが、マハティール氏はもちろん哲学者ではなく、2年前までマレーシアの首相を22年間にわたって務めていた政治家です。マレーシアの政治家というだけでなく、アジアを代表し、アジアの歴史に残る大政治家と言っても過言ではありません。その彼が提唱したのが EAEC です。

本報告では、15年前にマハティールが何を考えて、現在の東アジア共同体構想とオーバーラップする点の多いこの EAEC 構想を提唱したのか、どういう形

で実現しようとしたのか、さらにそれに対して国際社会からどのような反応があったのか、そのあたりを手がかりに、今後の東アジアにおける共同体というものを展望してみようと思います。

なお、私の報告はお手元のレジュメ集に沿って進めていきます。追加の資料は特に用意していませんが、必要に応じて前のパワーポイントの画面で補足的な資料を紹介していくことにします。

まず、マハティールと東アジア共同体という小見出しをつけた部分です。先ほど吉野先生からご紹介がありましたとおり、今年の12月中旬に、初めて東アジアサミットというものが開かれます。16カ国の参加国の首脳が集まって、公式に「東アジア」をタイトルに付けた初めての会議が開かれるわけです。

これはマレーシアのクアラルンプールで開かれますが、15年前の1990年、やはり12月に、同じマレーシアのクアラルンプールにおいて、当時マレーシアを訪問中の李鵬中国首相との会談の中でマハティール首相が EAEC 構想を初めて提唱しました。その意味ではちょっとした因縁がありまして、当時 EAEC 構想を提唱したマハティールにしてみれば、15年たってやっと自分の願いがかなったという、少なくとも半分は喜ばしい気持ちでこのサミットを迎えようとしているのではないかと想像します。彼は既に政治の一線を退いていますから、今はリングサイドから傍観者として成り行きを見守る立場ですが、おそらくはそのような思いでながめていることでしょう。

まずここでは、EAEC 構想提唱の経緯を若干ご紹介しておきます。当初、マハティールは、この枠組みを East Asia Economic Group と呼び、「グループ」というタイトルをつけて提唱しました。これを縮めて EAEG と最初は呼んでいたのです。ただ、「グループ」として内と外を明確に分ける表現で境目を作るのはちょっと行き過ぎじゃないかという周りからの批判を受けて、Group を Caucus（「協議体」という、当初はあまり聞きなれない言葉に置き換えました。以後、East Asia Economic Caucus、略して EAEC と呼ばれるようになったのです。

現在、さかんに議論されているのは、下に示しましたように「東アジア共同体」です。これにも EAEC と同じ East Asia が組織名の中に含まれています。これまでさまざまな組織がアジア・太平洋地域で企画され、また実現してきま

したが、East Asiaという言葉をそのまま明確に盛り込んだ組織名というのは、そうたくさんあるわけではありません。その意味では、15年前のマハティールの名称のつけ方や考え方が、かなり色濃く引き継がれていると言っても過言ではありません。また、メンバーの国々の顔ぶれを見ても、後で詳しく述べるとおり、主要な部分はほとんど引き継がれています。

じつは、マハティールがEAECを提唱した時期には、East Asiaという名前をつけた共同体構想はむしろ評判が悪かったのです。さまざまな国から批判を受け、その中で彼は批判に必至に耐えながらEAECの実現を目指して頑張っていました。そういう意味で非常に辛い思いをしていますから、15年経って自らの構想に近いものが実現しつつある現在、それ見たことか、という思いが彼の中にあっても当然だと思います。

ただし、思いの中の半分か3分の1かはわかりませんが、喜びながらも一部では、自分が提唱したものとはちょっと違うぞ、これはいかなものだろうとの思いが残る面もあるはずです。例えば、メンバー国の顔ぶれです。今回のサミット参加国の中には、マハティールとしては納得のいかない国が一部含まれているようです。この点は、後ほどお話しします。

いずれにしても、15年の間にこういう変化があったわけです。かつては、強い向かい風を受けていた構想が、今はある種の追い風を受けて推進されようとしている、いったい15年間の中で何がどのように変化したのでしょうか。

変わった部分と変わらない部分とが考えられますが、ここでは特に15年経っても変わらない点に注目してみたいと思います。なぜなら、もし不変な部分があるとしたら、それは今後の東アジア共同体を見通すときにも、やはり重要なポイントとして考慮すべき点といえるからです。このような観点から、少しEAECおよびマハティール哲学について考えてみたいと思います。

マハティールの思想、もしくはEAECと彼の思想との関係を考える前に、まず、EAEC構想の背景について若干振り返ってみたいと思います。マハティールがこの構想を提唱した理由を考える場合、当時の世界情勢、特に国際経済情勢を考える必要があります。EAECの提唱は1990年ですから、皆さんご存じのように、冷戦がヨーロッパで崩壊し、ヨーロッパでは社会主義の国が次々と資本主義の国に変わっていく時期にあたります。アジアではそこまで急激な変化

は起こりませんでした。中国が徐々に門戸を開いて、改革開放に向けてそのスピードを速めていこうとする時期でした。

そういう時期に出された構想ですが、その背景の一つには、冷戦が終わって一元化した世界の市場を一体どのようにコントロールしていくか、特に、社会主義と資本主義という区別がなくなって一元化した市場に自由貿易というジェネラルなルールをグローバルスタンダードとして普及させる必要があるのではないかという思いがあったと考えられます。

とはいえ、先ほど吉野先生からご紹介がありましたように、これはなかなか簡単に進むものではない。世界同一基準をつくるということに関しては、各国にいろいろな個別事情があり、それらを盾に統一基準作りに反対する抵抗勢力がたくさん存在しました。日本のコメ生産を維持しようとする力も一つのりっぱな抵抗勢力です。ということで、なかなか包括的で単一のルールの構築が進まないという事態がこの時期に起こりました。しかし、そのまま放置するわけにはいかないということで始まったのが、とりあえず地域ごとに自由貿易圏を作って急場をしのごうという動きでした。特にヨーロッパと北米でそういった傾向が強まっています。

この動きをみてマハティールは危機感を覚えるわけです。つまり、マレーシアや他の東南アジア諸国のように、小国であるけれども貿易に依存している国々にとっては、すんなりと自由貿易の世界統一基準ができることが望ましいにもかかわらず、大国の利害対立によってそれがうまく進まず、そればかりか、先進国を中心に幾つかのブロック経済ができあがる方向に進めば、貿易で食っているアジアの小国が最も割を食うことになる、といった危機意識です。

このような状況を打破するための策を模索する中で、ひとつには、小国が結集して自由貿易体制構築に向けた動きを後押しするような働きができないかという考えが生まれ、さらに、包括的かつ統一的なルールづくりに失敗し、先進国中心のブロック経済化が進んでしまった場合を想定して、最低限のセーフガードとしてアジアにも特定の貿易圏を作っておく必要があるのではないかという考えが芽生えてきたのです。このような考え方に基づいて、とりあえず中国の李鵬首相に EAEC を提案してみたというのが、この構想のそもそものきっかけでした。

当時、想定されていた構成国としては、まず ASEAN 6 カ国（現在は10カ国ですが、当時はまだ6カ国）、それに日本、中国、韓国、さらには台湾、香港が含まれていました。それから、今はもう ASEAN の中に入っていますが、当時はまだ入っていなかったインドシナ3国とミャンマーを含めることも考えられていました。大体このくらいの範囲をマハティールはメンバー国として想定したわけです。一つのポイントは、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドが含まれていなかったことです。EAEC 提唱の前年にできた APEC のメンバーには入っていた白人国家がすべて除外されていたのです。

この点を確認するために前の画面をご覧ください。1989年、ヨーロッパの冷戦が崩壊する年ですが、この年に APEC という組織が実体化することになりました。最初のメンバー国は、ASEAN 6 カ国（タイ、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、インドネシア）、それに北東アジアの日本と韓国、そして、この APEC の実現に向けて努力をしたオーストラリア、さらには太平洋を隔てたカナダとアメリカ。これらの国々が1989年の段階での APEC の創設メンバーだったのです。

EAEC が提唱されたのはその翌年ですが、画面上にその範囲を描くとこのような部分となります。APEC の西側半分がすっぽり入る形です。ただし、これだけでなく、EAEC 構想には中国、香港、台湾が含まれていました。それから、後に ASEAN に入ってくるベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマーの4つの国です。マハティールは当時からこれら4カ国を同一のグルーピングに含めるべきとの考えを持っていたわけです。

その後、APEC の方も拡大し、いま点滅させた中国、香港、台湾が加入、ベトナムも後にメンバーになりました。なおかつ、太平洋を挟んだ中南米の国々が3つ入り、さらにオーストラリアの北側にあるパプアニューギニアとさらにはロシアも加入するということで、結果的に APEC は非常に大きな枠組みに拡大していきます。一方、東南アジアにおいては、先ほど述べたように、大陸部の4つの国が1990年代の中ごろから後半にかけて ASEAN に加盟し、ASEAN 自体が10カ国体制になりました。

こう見ていくと、明らかなことがひとつあります。EAEC = The Caucus without Caucasians という言い方がありますが、それに良くあらわれています。

Caucasians とは一般に白人全般を指しますから、上記の表現は、EAEC とは白人を抜いた Caucus であるとの意味になります。白人抜きでアジア人にメンバーを限った枠組みを EAEC と言うという、半分揶揄をした言い方ですが、アジア太平洋の地図を見ながら考えると、15年前にマハティールが考えていたこの色分けと現在議論されている東アジア共同体の構成とが重なってくるのです。

この点は表面的には強く表明されたことはありませんでしたが、やはり EAEC を考えるときに抜きにして語れない部分だと思えます。太平洋を西と東を分ける、とりわけ白人国家を抜いてアジア人の国家中心でひとつのまとまりをつくるという、このあたりが EAEC の非常に意味深い側面ではないかと思われれます。

このような EAEC ですから、当然、いろいろな反発が出たわけです。真っ先に、しかも最も過激に反発したのがアメリカでした。これはまさに人種差別的だ、人種をもとに区切られている枠組みじゃないかと。また、APEC という太平洋の東西を包含した枠組みをせっかく作ったのに、それを一年後にわざわざ分断する気か、という反発も起こりました。アメリカは批判するに留まらず、日本や韓国に対して、マハティールの構想に加わるんじゃない、こんなものに入ったら絶対にいかんと、しきりに説得工作を行ったのです。

一方、マレーシアを取り囲む ASEAN の仲間たちの出方ですが、これらの国々は本音と建前を使い分けながらも、やはり表面的にはアメリカに配慮する姿勢を取らざるを得ませんでした。また、ブロックとしてまとまればまとまったなりに他とのつきあいが悪くなるので、東南アジア域外への貿易依存率が高いこの地域が内向的にまとまるのは適当ではない、という現実的な見方もありました。このような理由から、ASEAN 諸国からもなかなか色よい返事を得ることができませんでした。

こういった逆風を受けながらも、当時のマレーシアは EAEC の実現のためにねばり強く努力しました。例えば、マハティール首相やラフィダ国際通商相をはじめとする閣僚は、外遊のたびに訪問先の各国で盛んに EAEC の宣伝・勧誘活動を展開しました。しかしながら、結局のところ多くの賛同を得られず、当時は構想の域を出ることはありませんでした。

ちなみに、現在議論されている東アジア共同体の範囲（メンバー国）につい

て触れますと、アジア諸国についてはEAECからは一つ台湾が欠け、代わりにインドが加わっています。それから、EAECには入っていなかったオーストラリア、ニュージーランドが加わっています。この枠組みでとりあえず第1回目はスタートすることになっていますが、オーストラリアとニュージーランドが加わっている点については、最初に述べたように、マハティール首相をして違和感を抱かせている部分ではないかと思えます。

では次に、このようなEAEC構想を15年前に打ち出したマハティール自身の元々の政治哲学、もしくは政治的な考え方がどういうところにあったかということを考えてみたいと思えます。マハティール政権は、1981年7月から22年数カ月にわたる長期政権でしたが、その割にはひどい腐敗もなく、マハティールが職を辞するにあたっては多くの国民に惜しまれ、拍手で送られながら舞台を降りたという長期政権の終わりとしてはじつに珍しい光景が見られました。話はやや脱線しますが、彼はたいへんな親日家で、息子さん、娘さんが留学や仕事の関係で日本に滞在していたこともあって、公式、非公式に何十回となく日本を訪れています。彼の在任期間中に在日マレーシア大使を長く務めていたカティブ氏の話聞いたことがあります。マハティールは日本の温泉場が好きで、北から南まで有名な温泉地は、同大使をお供にくまなく回ったといえます。温泉場に着くとまずそば屋へ行くそうです。その地で一番うまいそば屋はどこかを尋ね、そこでまずそばを食べることから視察を始めるのが恒例だったようです。彼が打ち出した「ルック・イースト政策」は有名ですが、自ら率先してそれを実践していたというわけです。

一方、国内的にはどうかというと、これにはいろいろな評価がありますが、少なくとも数字で見ると、マレーシアは彼の在任期間中、平均して7～8パーセントの経済成長を続けていました。20年間以上それが続いたのですから、その間に所得も4倍増程度に拡大したわけです。ご存じの方も多いと思いますが、マレーシアは典型的な多民族国家で、ちょっと油断するとすぐにでも民族対立が起こりそうな国です。しかし、少なくとも彼の在任期間中には目立った民族対立は起こらず、政治的な安定を確保することに成功したといえます。安定を確保するために強権的な姿勢で反政府的な勢力や言論を押さえつけた部分もありますが、国全体の発展という面ではかなり成功したといえます。

さらに彼は、国際的にも非常にアウトスポークンで様々な問題に対して積極的な発言をする政治家として有名でした。国際社会の中で弱い立場にある国々、例えばアジア諸国とか発展途上国とかイスラム諸国などの立場に立った発言を繰り返してきました。また、現在の国際政治経済秩序は先進国に優位にできしており、先進国が途上国を支配する形態になっているという観点から言論を展開してきました。古い歴史の中には、そういうことを声を大にして言う途上国の政治家が数多くいましたが、最近はそのようなことを正面切って言える途上国の指導者は少なくなっており、そんな中で彼は非常に貴重な存在だったわけです。それだけに欧米諸国からは警戒感を持って受けとめられた面もありますが、少なくとも途上国側もしくはイスラム諸国側からは、弱者の代弁者、頼りになる男、として高い評価を得たのです。

彼が演説している場面の動画ファイルを2つほど用意してきたのでご紹介しましょう。

(マハティール氏の演説①)

これは引退直後に新聞社のインタビューに英語で答えている時のものです。

(マハティール氏の演説②)

これはマレー系与党 UMNOの党大会でのマレー語の演説です。近年取りざたされている「レジーム・チェンジ」について述べています。「最近、欧米の国々では、途上国のいろいろな国に対してレジーム・チェンジが必要だと言っている。しかし彼らの言うレジーム・チェンジとは、結局、自分たちに都合のいい政権を打ち立てたいということに過ぎず、レジーム・チェンジして新しく生まれた政権が自分たちにとって気に入らないものであったら、再びレジーム・チェンジを要求してくるだろう。それは欧米の身勝手な発想にすぎない」といったことを述べています。これは国内での演説ですが、彼は海外でも平気でこういうことを言いますから、そういう意味で、先ほど言いましたように、かなりアウトスポークンで大胆な発言をする政治家といえるでしょう。

彼の政治思想、政治姿勢についてさらに何点か紹介します。今の点などにも象徴的にあらわれていますが、基本的には、その時代、時代で優勢な価値観とか権威に対して反論し、かつ、それに対するオールタナティブを提示することを意識的に行ってきた政治家だといえます。その中で一つ、アジア的価値観に

ついて取り上げてみたいと思います。レジュメ集の中にも挙げておきましたが、これは、マハティールとかりー・クアンユーが、14年くらい前にしきりに主張していたあのアジア的価値のことです。西欧的価値観と対比しながらアジア的特性を強調したり、アジア独特の政治体制や経済体制を正当化するためにしばしば使われました。例えば、個人の権利よりも社会やコミュニティのニーズを優先させるべきではないか、個人の利益とか権利を追求するための自由よりも社会とか集団全体の利益に資するような規律・勤勉性をより重視すべきではないか、という主張です。

マハティール自身は、民主主義、これは元をたどれば西欧的な概念ですが、これ自体を決して否定するわけではなく、むしろ東南アジアの政治家の中では法治とか民主主義的議会制度というものを重視してきた政治家といえます。とはいえ、彼としては、民主主義自体は良いが、個人の権利は社会に対する義務とバランスさせられて初めて成り立つものだ、という点を強く主張してきました。西欧的価値に対しては、良いところも数多くあり、マレーシアが近代化を進めるに当たって活用した面が多いことを認める一方で、現在の欧米諸国の状況を見みると、過度に自由や平等が追求・主張されているため、行き過ぎた物質主義がはびこり、快樂主義や自己中心主義が横行して、結果的に、社会のシステムが、全部とは言わないまでも、部分的に崩壊してしまっている、といった論調で批判してきました。

結局、西欧的な価値が絶対的に優れたものとはいえ、アメリカンデモクラシーさえ受け入れれば誰もがハッピーになるということはない。それぞれの地域、国、民族に合った制度や仕組みというものがあって然るべきではないか。西欧的価値とアジア的価値を比べてどちらが上か下かという話ではなくて、相互に尊重し合う、もしくは相互に認め合って少なくとも他の存在を認定し合うことが重要ではないか。彼が最も主張したいのはそういった点だと思います。

時間の関係で急ぎますが、次に、このような主張が彼の基本的な政治的理念・哲学だとすれば、それがEAECとどのように絡んでいるかということです。これも詳しくはレジュメに書いておきましたが、まとめて言えば、EAEC構想それ自体も、上記のようなマハティール的な考え方に沿った一つのブレークスルーだと考えることができるのではないかとということです。大国主導の国際秩序、

西歐的価値の普遍視、価値やライフスタイルなどについて欧米が上でアジアが下という暗黙の評価基準といった、現在の国際社会の価値体系を一気にブレークスルーしたいという意図が EAEC 構想の中には含まれていたのではないかと考えます。つまり、この構想は単なる貿易圏を作ろうという話だけではなく、日ごろないがしろにされがちなアジアの中小国の意見を束ねて国際社会でアピールする、そのための一つとして、仕掛け、システムとして提案された面があるのではないのでしょうか。日本と中国は小国ではありませんが、日・中という地域の大国の力を借りて、東南アジア諸国が今まで表明できなかった意見を国際社会に向けて吐露したいという思いが根底にあったように思います。

こういったブレークスルーの発想に対してアジア諸国の反応はどうだったかというと、これはなかなかアンビバレントなものがありました。心情的には共鳴しながらも、正面切ってそれに賛成というわけにはいかない部分が多かったからです。ただ、日本においても、私の知る限り、かなりの人々がマハティールに賛成の手を挙げましたし、アジアの他の国の中でも共鳴する声はかなりのボリュームに達していたと思います。外交上は簡単には結実しなかったものの、マハティール的な発想への共感は決して小さなものではなかったのです。

最後に、現在の東アジア共同体に対するマハティールの見方に若干触れておきます。マハティールは去年6月に慶應義塾大学から名誉博士号を授与され、その時の記念講演で「東アジア共同体と日本の役割」という、まさにそのものズバリの話をしていました。その中で彼は、東アジア共同体はこれからさらに進展していくであろうが、基本的にメンバー国はアジア的な価値観を共有する ASEAN 諸国と日、中、韓であるべきだと述べています。もちろん、彼は既に政策決定者ではないので、あくまで一つの意見に過ぎませんが、相変わらず EAEC 提案時と同じ主張をしていました。

最初のところに話を戻しますと、12月に行われる東アジア共同体の首脳会議のメンバー国の中には、オーストラリアとニュージーランドという、2つの白人国家が入っています。このあたりを一体どういうふうに理解すればいいのか。マハティールは恐らく、それはおかしいと言うでしょうが、我々にとってもその理由を明確にしておくことは重要だと思います。経済の実態や現実動いているネットワークを想定して何かまとまりをつくろうというのであればオース

トラリア、ニュージーランドを入れるのはわかりますが、それであればアメリカはなぜ入らないのか。アジア的な何かを共通項として追求するのであれば、オーストラリアとニュージーランドをあえて入れようとするのはなぜか。いったい何を中心にこの共同体をまとめていこうとしているのか、いったい何がコアなのか。こういった点について最低限の了解がないと共同体としての求心力は生まれにくいのではないかという気がします。

オーストラリア、ニュージーランドを入れるというのは、2002年の小泉首相の提案の中に含まれており、じつは日本的な発想なのです。日本はいったい何を考えているんだ、相変わらず東アジア共同体を真剣に実現する気はないのか、マハティールはそう思っているのではないのでしょうか。コンセプトの不明確な中途半端な枠組みをつくって何ができるのか、と問いたくなるのはマハティールだけではないでしょう。一度入れると言ってしまったものを途中から除外するのは難しいのかもしれませんが、メンバー構成ひとつをとっても、いま一步この枠組みについて説得力のある説明がなされない限り、結局のところ、可もなく不可もなく、そして実もなくに終わり、力強い歩みに発展するのは難しいのではないかと感じる次第です。

長くなりましたが、以上で私の報告を終わりにさせていただきます。

○司会（黒柳）

金子先生、どうもありがとうございました。お話としては興味も尽きないわけですが、全体の都合上、少し圧縮していただきざるをえませんでした。ご了解ください。